

古代アメリカ学会 第8回東日本部会研究懇談会<2017年度修士論文発表会>のお知らせ

【日時】：2018年3月25日（日） 13：00～17：00 時頃まで

【場所】：法政大学市ヶ谷キャンパス 80年館7階「角会議室」

【趣旨】

今回の研究懇談会では、2017年度に修了される4名の大学院生を迎え、修士論文の内容についてご発表いただきます。内容は、メキシコ、エルサルバドル、コスタリカ、ペルーでの現地調査にもとづいており、多岐にわたります。学会員・非学会員からの積極的な意見・コメントを期待します。是非この機会にふるってご参加ください。

【プログラム】

趣旨説明 13:00

発表1 13:05～13:45

発表2 13:45～14:25

休憩 (15分)

発表3 14:40～15:20

発表4 15:20～16:00

〈発表1〉

メキシコ トラランカレカ遺跡の磨製石器研究 —形成期における食物加工具の利用に関する考察—

荒木昂大（東北大学）

要旨

現在のメキシコ合衆国プエブラ州のサン・マティアス・トラランカレカ市近郊に位置するトラランカレカ遺跡は、紀元前800年～後250年ごろにかけて居住され、形成期のメキシコ中央高原における歴史認識に一石を投じるものとして注目されている。2012年から嘉幡茂氏・村上達也氏を共同団長として、トラランカレカ考古学プロジェクトが組織され、2017年までに第6シーズンの調査が実施された。

平成29年度提出修士論文「メキシコ トラランカレカ遺跡の磨製石器研究 —形成期における食物加工具の利用に関する考察—」は形成期メキシコ中央高原の一大拠点であったトラランカレカでの磨製石器の利用状況とそこから導きだされる生業、生活の復元を目的とした研究の成果をまとめたものである。

研究の方法としては、トラランカレカ考古学プロジェクトで実施された表面採集調査で蒐集された磨製石器および礫石器の計測、観察、分析という形を取っている。これらは筆者が2016年と2017年にメキシコ合衆国に渡り、プロジェクトの研究所で実物の遺物を前にして取り組んだ。研究の中心となったのは、メタテ・マノの型式分類である。また、トラランカレカ遺跡で実際に発掘調査に参加し、その体験の中で得られた多くの知見も本研究の中に取り込んでいる。

トラランカレカ遺跡では毎年新しい発見が続いているが、本研究はそのプロジェクトの成果とメタテ・マノをどのように結びつけることができるのかを示し、将来的な調査の拡大を視野にいれた議論を提起するものである。

〈発表2〉

コスタリカにおけるヒスイ製ディオス・アチャ型ペンダントの研究

久保山和佳（早稲田大学）

要旨

本研究では、先コロンブス期のコスタリカにおけるヒスイ製ディオス・アチャ型ペンダント(以下、ディオス・アチャとする)の製作から使用に見られる製作者集団の行為に着目し、その機能および社会的役割について考察した。

対象地域とするコスタリカは中間領域に属し、その南北を古代メソアメリカ文明と古代アンデス文明に挟まれているが、これらの大文明のような国家段階に達した社会はなく、巨大な公共建造物も確認できない。また、階層化社会は存在したが、その生活様式は未だ明らかでない。コスタリカ北部ではヒスイを代表としたメソアメリカの文化的影響が見られるのに対して、南部では金製品などのコロンビアをはじめとする南米大陸からの影響が強い。このことから、当該地域は2つの大文明の間を繋ぐ「文化の橋」であったと考えられている。

本研究で対象とするディオス・アチャは、紀元後300～700年に利用の最盛期を迎えた副葬品で、微細な彫刻と斧形状が特徴的である。コスタリカのヒスイ製品において最も検出例が多いのがこのペンダントだ。多様な形態と、製作痕が確認できることから、考古学的アプローチから当時の社会を素描するのにふさわしい遺物であると考えられる。ディオス・アチャの出現期は、先コロンブス期のコスタリカにおいて社会の階層化が認められるようになった時期(紀元後300～600年)でもある。大文明の周縁地に位置する当該地域で、社会の階層化とエリート存在を示す重要な威信財であるディオス・アチャを研究することは、「文化の橋」たるこの社会の階層化に伴う地域間交流やその社会背景について考察する一助となると考える。

本研究に際し筆者はコスタリカのヒスイ博物館を訪れ、同博物館の展示品を含めた所蔵品を対象にディオス・アチャ340点の実見調査を行った。既往研究でペンダントの芸術性や象徴性のみが注目されがちである状況を鑑み、より考古学的手法を用いた研究を試みた。本稿では、(1)先行研究におけるディオス・アチャの形態分類法を再確認し、より体系的な分類基準を確立、(2)製作痕の観察から製作工程・技術を推測し、異なる製作者集団の存在を検討、(3)斧状を素材とするディオス・アチャに、装身具とは別にそれ以外の使用方法が存在した可能性を提示、(4)古代コスタリカにおいてディオス・アチャが果たした社会的役割の検討を行った。

このようにして、既往研究で一般的であった象徴性の研究に一石を投じ、形態分類、製作技術研究、機能分析という3つの考古学的アプローチから当該ペンダントを検討した。その結果として、ディオス・アチャは、国家段階に至らなかった先コロンブス期のコスタリカにおいて、「共同体」意識の強化といった重要な社会的役割を果たしていた可能性が高いとの解釈に至った。これまで象徴研究の先に進まなかったディオス・アチャ研究において、製作者の意図やその多様性、そして当時の社会の一端を示すことができた。この点においては、本研究の目的は達せられたと言えよう。

〈発表3〉

古典期前期メソアメリカ南東部太平洋岸地域におけるテオティワカン様式土器の受容

深谷岬（名古屋大学）

要旨

本研究の目的は、テオティワカンの文化や宗教などが古典期前期メソアメリカ南部太平洋岸地域の諸センターにおいてどのように受容されたのかを明らかにし、テオティワカンとメソアメリカ諸

センターの相互関係について解明することである。そのために、高位の人物の墓やそれに関する遺構から出土し、威信財としての性格を持つテオティワカン系遺物である三脚円筒土器の分析をおこなった。

近年メソアメリカ地域では、テオティワカン系遺物の分布状況や流通した時期を明らかにする基礎的な研究がなされないまま、テオティワカンがメソアメリカのセンターに与えた影響についてマクロな視点から論じられてきた。一方で、遺物研究というミクロな視点から両者の関係性について明らかにしていくことも重要な研究課題である。よって本研究では両者の関係を明らかにしていく第一段階として、メソアメリカ南部太平洋岸地域における三脚円筒土器の分布状況を明らかにすることと、三脚円筒土器に現れる地域差を明らかにすること、遺物の基礎的研究に基づきメソアメリカ南部太平洋岸地域の各センターとテオティワカンの相互関係について明らかにすることを目的とした。

三脚円筒土器の法量の規格性と装飾様式の分析の結果から、メソアメリカ南部太平洋岸地域では、テオティワカンの規格に一致する三脚円筒土器も出土するが、カミナルフユでは縦長、ミラドールでは横長の胴部を持つものが多く出土することが明らかとなった。これらは諸センターが独自の規格に基づいて土器製作をおこなっていた可能性を示唆していると言えよう。また、当該地域では、テオティワカン様式、マヤ様式、在地系の装飾が共存していることも明らかとなった。これらのデータから、三脚円筒土器の流通は、各センターの高位の人物によって交換されたモノや情報が、テオティワカンと諸センター間を双方向的に移動した結果であり、テオティワカンによる手工業製作の規格統制はなかったと考えられる。

〈発表4〉

アンデス文明形成期後期から末期の社会変化とその過程 —ペルー北部中央山地ワヌコ盆地の事例を中心として—

金崎由布子（東京大学）

要旨

アンデス文明形成期後期（前 800 年～前 250 年ころ）から末期（前 250 年～1 年ころ）への移行期は、後期に汎地域的に広がった宗教イデオロギーの急激な衰退を背景とする社会変化の時期であると捉えられてきた。近年、当時期についての考古学調査の蓄積が進む中で、このような中央アンデス地域全体での社会変化の過程をより具体的に明らかにするために、当時期の各地で展開した諸社会の動態とそれら相互の関係の解明が求められている。

このような課題意識のもと、発表者はペルー北部中央山地ワヌコ盆地の事例を中心として研究を行った。本発表では、その成果を発表する。具体的な内容は以下の三点である。

一、当時期の中央アンデス地域における、土器様式の移行年代の地域ごとの傾向。および、その中でのワヌコ盆地の位置づけ。

二、当時期のワヌコ盆地における、土器生産システムから見た遺跡間関係の変化。

三、以上から考察した、当時期のワヌコ盆地の社会変化の過程。

以上の成果をもとに、これまでの当時期の地域社会の変化に対する見方に対し、新たな知見を提示することが、本発表の目的である。

【連絡先】：

- ・市川 彰（名古屋大学高等研究院） ichiaki5@lit.nagoya-u.ac.jp
 - ・古代アメリカ学会事務局 jssaa@sa.rwx.jp
- （上記アドレスの*を@に換えて下さい）